

テスト像よりみた吃児の母子関係

——ソンデイ・テストによる——

乾 原 正

一 問 題

「社会における同一の地位と役割は同一のパースナリティを形成し、異なる地位と役割は異ったパースナリティを型づける」⁽¹⁾ならば、パースナリティの形成期ともいうべき幼児期における家庭というもつとも身近かで、基本的な社会が重視せられねばならないことは明白である。パースナリティの形成に対して家庭環境が果たす役割についての研究は心理学、教育学、社会学等の立場から検討されてきたが、とりわけ非行少年の多くが家庭環境に恵まれていないという⁽²⁾ことを考えてもその重要性が認められるであろう。家庭環境の中でも特に親子関係、就中母子関係は「パースナリティの歪みは乳児期における適当なマザーリング Mothering によつて、おこらないようにされうる」⁽³⁾といわれるように重要なものである。Jersild, T. 氏の著 *Child Psychology in Children and Their Parents* なる章を設け、両親の態度と性格特性の重要性を論じているが、その中で彼は Shirley, L. L. & Behrens, M. L. の研究を引用し「両親の役割を評価する場合、子供の養育についての方法や技術だけに集中するよりも根底にある態度を研

究することが重要である⁽⁴⁾と述べている。しかしながら続いて彼は子供と両親の関係を明らかにする方法について「両親の Personal Qualities を神秘的な方法で明らかにすることは意味がない」と述べ、この種研究の方法の難しさを論じている。事実過去の親子関係についての研究方法は各々の研究者により種々異っている。唯、それらの研究方法に共通していることは、一方において家庭環境（例えば両親の有無、経済的状況、職業等）や人間関係及び両親の態度を求め、他方に子供の人格特性乃至適応の問題を明らかにし、その両者の相関関係を見出そうとすることにある。ここで考慮されねばならないことは「環境と個性を直接結びつけず、その間に環境体験をおいて考えること」である⁽⁵⁾。

これらの方法による親子関係の研究についての一、二を紹介すれば、中西らは親の子供に対する態度を(i)権威関係、(ii)拘束関係、(iii)親疎関係、(iv)罰の関係について質問分析し、一方子供には、(i)親の罰に対する、(ii)親の保護監督に対する、(iii)親疎関係に関する各態度及び(iv)その他についての質問を行うとともに教師の観察による子供の行動特性を品等スケールを用いて評価し、両者の相関を検討した結果、一般に望ましい親の態度は望ましい子供の行動特性と関係があるという結論を得ている。しかし彼等も認めているように、この間の因果性が得られていない。これはその方法が皮相的な面にのみ有効であり、親子の深層を把握することに充分でないからとみられる。

これに対して、Burchinal, L. G. は「両親の受容と子供の適応」について Porter Parental Acceptance Scale と Rogers Test of Adjustment を用いて試みた結果、親子間には相関が認められなかったと発表している。そしてこの研究に用いた手段が不適当であったと述べていることは先にも触れたこの種の研究がその方法にあることを如実に示すものである。

近ごろ親子関係の研究においても、パースナリティ研究に著しく活用され、その有効性が認められている投影法を

用いたものが多くみられる。特にT・A・T、S・C・T、ロールシャッハ法等が家族関係乃至人格特性の測定に應用せられている。

堀越は「家族像⁽⁶⁾に対する態度とロールシャッハ・M（人間運動）反応との関連」と題して、親子関係が及ぼす他人との共感的関係を明らかにしようとして、S・C・T、及びロールシャッハ法を用いた結果、「あたたかいよい母親、それとあたたかくはないかもしれないが、悪くない父親をもった人は、他人とあたたかい共感的関係をもてるひとがらをつくることができる」と結論している。しかしこの種の研究は子供からのみの一方的検討にとどまり、親子両面からの力動的な把握をなすに至っていないことが、親子関係の研究の欠陥として指摘されよう。

しかるに親子の関係をより力動的に把握するためには上述した如く、その根底をなすものを明らかにする必要がある、しかも両者の相互の関係を見出すに容易であることがこの種研究の方法として要求されるものである。

いづれにせよ親子関係の研究を進めるに大きな障壁をなすものが、先き程来述べてきた研究の方法であり、又それ以上に実験を試みる対象を獲得することの困難さである。これはどの研究においても常に起る問題であるが、特に親子関係の研究においては、親と子の相互関係を扱うゆえに必らず両者同時の協力的な態度がなければその根底からの把握は望めないであろう。

二 目 的

すでに述べた通り、親子関係の研究においては、親子両者の人間性の深層を熟知することによって理解されなければならない。そのためには方法上特に留意しなければならない点を指摘した。

本研究においては近時の無意識研究の方法として益々多方面にわたって活用せられている投影法 Projective Method を適用することによって、かつ親子ともに同一の方法を施行することによって得られる親子のテスト像を検討しようとするものである。この第一段階としてソンディ、Szondi, L. が説く運命分析 Schicksalsanalyse 及び家庭的無意識 Familiären Unbewussten の方法として考案したソンディ・テスト Szondi Test を用いる。親子関係については両親に対する施行が困難であったために特に母親に限定した。従って以下に述べる研究結果は母子関係に限定される。

三 方 法

1 ソンディ・テストの適用

ソンディ・テストの構成及び原理については既に三、四の研究報告により紹介されているので省略するが、その思想が深遠であり、かつ難解であるに拘らず今日、精神医学、治療効果の判定及び評価、犯罪心理学、職業補導、教育学の広領域にわたりこのテストが活用せられている所以は、従来未知であった衝動体系を可視的に把握し、深層心理を一層厳密に探求することができ、明らかにされた潜在的な衝動を社会集団研究に有効に生すべく容易に考慮され、加うるにテスト素材の質と施行法の簡易さがこれらの諸領域に歓迎されたからである。しかるにこのテストが本来実験的家族研究 die experimentelle Familienforschung の目的のために作られたものであることも親子関係の根底を解明すべき方法として採用するに大きな意義があろう。むしろ前述の諸領域における応用価値の高さが本テストをして家族研究への応用を過小視せしめたものであろう。

2 実験

実験対象 本研究はソンディ・テストを用いての親子関係研究の最初として、ソンディが精神診断表に衝動疾患として掲げている吃者について試みることとなった。

対象は大阪府下 A 市立 A 教育研究所主催による吃音矯正講習会並びに大阪市内の B 吃音矯正学院に來所した四才から十二才（平均八才七ヶ月）の吃児と、二十五才から五十三才（平均三十四才二ヶ月）の間に年令分布を示す母親の六十三組である。なお吃児六十三名中には女兒十一名が含まれている。

実施 実験は A 教育研究所主催の矯正会が行なわれた昭和三十三年七月と B 矯正学院で行った昭和三十七年七月の二回にわたるものである。勿論実施法等については両回に異なることのないよう留意した。

テストは原法の実施法を改良した集団的個人法で行ったが、テスト施行上原法の個人法と全く変らないものである。唯ソンディ・テストでは一人六回乃至十回の検査を行うことが原則となっているが、本実験では対象の都合上、回を重ねることが不可能であったために、デイリー Det. S. K. が犯罪者の鑑別診断についての論文で採用している方法にならない、各人一回のテスト成績をもって一個人の連続テスト成績とみるやり方を用いた。

テストは両矯正会とも学校で行われたので、教室において実施した。施行時はともに午前中で被験者の協力的な態度によりテスト結果を左右するような問題も起らず手続き通り行えた。

実験結果の整理 既述の通り本研究の実験結果は各人に一回試みたテスト成績を一人の連続したテスト成績として整理したものである。その他は原法に従って整理したものである。

第1表 衝動因子反応

因子 選択 反応 群	h				s				e				hy				
	+	-	0	±	+	-	0	±	+	-	0	±	+	-	0	±	
母親 群	f	40	6	4	13	10	28	17	8	14	20	23	6	13	31	8	11
	%	63.5	9.5	6.4	20.6	15.9	44.4	27.0	12.7	22.2	31.7	36.5	9.5	20.6	49.2	12.7	17.5
吃 児 群	f	41	2	9	11	20	23	14	6	24	13	14	12	15	30	12	6
	%	65.1	3.2	14.3	17.5	31.7	36.5	22.2	9.5	38.1	20.6	22.2	19.0	23.8	47.6	19.0	9.5

因子 選択 反応 群	k				p				d				m				
	+	-	0	±	+	-	0	±	+	-	0	±	+	-	0	±	
母親 群	f	1	41	17	4	10	30	15	8	31	7	19	6	33	11	11	8
	%	1.6	65.1	27.0	6.4	15.9	47.6	23.8	12.7	49.2	11.1	30.2	9.5	52.4	17.5	17.5	12.7
吃 児 群	f	5	35	13	10	16	21	19	7	17	13	28	5	10	25	15	13
	%	7.9	55.6	20.6	15.9	25.4	33.3	30.2	11.1	27.0	20.6	44.4	7.9	15.9	39.7	23.8	20.6

第2表 もっとも頻度の高い因子反応

因子 群	h	s	e	hy	k	p	d	m
母親群	+	—	0	—	—	—	+	+
吃児群	+	—	+	—	—	—	0	—

第3表 ベクトル変異 (I)

S ベクトル							P ベクトル						
S 群	独立した夫々の性衝動像		母親群		吃児群		P 群	独立した夫々の発作衝動像		母親群		吃児群	
			f	%	f	%				f	%	f	%
I	S ₁	h s ++	5	7.9	17	27.0	I	P ₁	e hy — 0	5	7.9		
	S ₂	0 +	1	1.6	2	3.2		P ₂	— —	9	14.3	9	14.3
	S ₃	+ 0	11	17.5	6	9.5		P ₃	± —	2	3.2	7	11.1
II	S ₄	0 —	2	3.2	4	6.4		P ₄	+ 0	1	1.6	5	7.9
	S ₅	+ —	17	27.0	16	25.4		P ₅	0 —	10	15.9	6	9.5
	S ₆	— 0	2	3.2	1	1.6		P ₆	0 ±	5	7.9	1	1.6
	S ₇	— +	2	3.2			II	P ₇	++	1	1.6	8	12.7
	S ₈	— —	1	1.6				P ₈	0 +	6	9.5	4	6.4
III	S ₉	0 ±			1	1.6		P ₉	0 0	2	3.2	3	4.8
	S ₁₀	+ ±	7	11.1	2	3.2	III	P ₁₀	± 0			4	6.4
	S ₁₁	— ±	1	1.6	1	1.6		P ₁₁	— ±	3	4.8	1	1.6
	S ₁₂	± +	2	3.2	1	1.6		P ₁₂	+ ±	2	3.2	3	4.8
	S ₁₃	± ±			3	4.8		P ₁₃	± +	3	4.8		
IV	S ₁₄	± 0	3	4.8	4	6.4		P ₁₄	± ±	1	1.6	1	1.6
	S ₁₅	± —	8	12.7	3	4.8	IV	P ₁₅	— +	3	4.8	3	4.8
	S ₁₆	0 0	1	1.6	2	3.2		P ₁₆	+ —	10	15.9	8	12.7

ベクトル変異(Ⅱ)

Sch ベクトル						
Sch 群	独立した夫々の自我像		母親群		吃児群	
			f	%	f	%
Ⅰ	Sch ₁	k P 0-	10	15.9	4	6.4
	Sch ₂	+-	1	1.6	2	3.2
Ⅱ	Sch ₃	-0	11	17.5	11	17.5
	Sch ₄	-+	9	14.3	8	12.5
Ⅲ	Sch ₅	--	15	23.8	11	17.5
Ⅳ	Sch ₆	++			1	1.6
Ⅴ	Sch ₇	+0			2	3.2
	Sch ₈	±0			3	4.8
	Sch ₉	±-	4	6.4	4	6.4
	Sch ₁₀	±+			2	3.2
Ⅵ	Sch ₁₁	0+	1	1.6	5	7.9
	Sch ₁₂	0±	2	3.2	1	1.6
	Sch ₁₃	+±				
	Sch ₁₄	-±	6	9.5	5	7.9
Ⅶ	Sch ₁₅	±±			1	1.6
	Sch ₁₆	00	4	6.4	3	4.8

C ベクトル						
C 群	独立した夫々の接触衝動像		母親群		吃児群	
			f	%	f	%
Ⅰ	C ₁	d m 00	2	3.2	4	6.4
	C ₂	0+	8	12.7	2	3.2
Ⅱ	C ₃	0-	3	4.8	16	25.4
	C ₄	0±	6	9.5	6	9.5
Ⅲ	C ₅	-0	2	3.2	2	3.2
	C ₆	-+	4	6.4	4	6.4
	C ₇	--	1	1.6	4	6.4
	C ₈	-±			3	4.8
Ⅳ	C ₉	+0	5	7.9	8	12.7
	C ₁₀	++	19	30.2	2	3.2
	C ₁₁	+±	2	3.2	3	4.8
	C ₁₂	+-	5	7.9	4	6.4
Ⅴ	C ₁₃	±0	2	3.2	1	1.6
	C ₁₄	±+	2	3.2	2	3.2
	C ₁₅	±-	2	3.2	1	1.6
	C ₁₆	±±			1	1.6

テスト像よりみた吃児の母子関係

四 考 察

I 衝動プロフィールによる母子の人格像

衝動因子反応の頻度、ベクトル変異にあらわれた全衝動プロフィールをソンディの精神診断表を基にして解釈し、母子両者の人格構造を明らかにしてみよう。

i 母親の人格像

一般に親の問題を論ずる場合、子供を受容し是認しているか、或いは反対に子供に対して拒否的であるかどうかが最初に考えなければならない主要なものであるが、本実験にみられる母親は前者に属するものといえよう。即ちやさしい、女性的な衝動を肯定し、母らしい愛情に満ちている。しかしその母親としての情愛が子供にとって健全で、建設的に前向きな姿勢をとり、現実化へと進んでいるものであるか否かについては多少の問題がある。それは子供の現実を充分に認識したものではなく、非現実的、理想的な子供を夢み、その実現には深い愛の絆が必要であり、全てであるというまでに盲愛的である。しかもそこには現実化への意欲がみられない。一般にいう過保護的、溺愛的であると思われる。

この盲愛が子供を独占しようとするまでの強い所有獲得の欲求となってあらわれると同時に、一見さりげない態度で円熟した関係を装いながら愛対象の子供が自分から離れて行きはしないかとの喪失不安が母親を覆っているとみられる。一般には子供への期待が大きく過支配的、干渉的であるといわれるものである。

これらの不安が内気や現実的、社会的な適応という自我の抑圧的機制と相俟って極度に抑えられ、偏執的な不安へ

と発展し、恐慌や恐怖の状態に陥入れ、外見的には平静な態度を示してはいるが、心的内部の緊張や不安の発情という激情の鬱積も時には荒々しく子供に向けられ開放せられる。このような心的状態は、子供には矛盾した不安定な母親の態度として受けとられている。

このような母親の衝動体系については、我々が試みた他の諸調査における結果からも肯定されるものである。即ち母親の日常生活にあらわれる性格特徴についての質問に対する自己診断として、口うるさい、明るい、気に病むたち、几張面である等の解答頻数が高く示されている。同じような結果が Moncur, J. R. の研究にもみられることは興味深い。彼は吃児の両親が(1)児童の要求を受容するよりも、権威をもって盲従を強いる、(2)厳し過ぎる訓練、(3)子に対する要求水準が高すぎる、(4)度を起した保護及び監督をする、(5)口やかましい等がその特色であると指摘している。

ii 子供の人格像

上述の母親像に対して子供は母親と同様に母らしい、やさしい女性的な愛情を肯定し求めているが、いつまでもこの状態にとどまっていることを快諾せず、現実を認識し、現実に応じた、筋の通った愛情を求めている。それ故に母親の盲目的愛情の対象たることを拒み、新しい対象を求め、人間化への徴候もみられるが、倫理的、制圧的な作用が働き、意志が一定せず、注意が散慢で目移りが多く、加えて自我の発達が不完全で、消極的、内向性が災いして、それを前面にうち出していけないで、内的世界に閉鎖的、自殺的に働き、感情の激しい流れをみせ、ヒステリー様の苦悶状態にあるとみることができる。

一般に吃児は神経質で、癇が高く、感情的で、劣等感が強く、情意が不安定で、注意が散慢で、物事に根気がなく、疲れやすいという性格特徴に合致するものである。

I 衝動式にみられる母子の人格像

第4表 衝動式

母 親 群	0		
	e_{29}	+	-
	s_{25}	d_{25}	p_{23}
	-	-	-
吃 児 群	k_{21}	hy_{19}	m_{19}
	+		
	h_{17}		
	0		
	d_{33}		
	-	+	-
	m_{28}	e_{26}	p_{26}
	-	+	+
	k_{23}	h_{20}	s_{20}
	-	-	-
	hy_{18}		
	-		

衝動式における両者の衝動構造を検討して先に述べた衝動プロフィールの解釈をより論理的に裏付けてみる。まず母親群の示した衝動式については、全ての衝動の根源的役割を果す基本要因は+である。即ちやさしい愛情、母らしさの欲求であり、主観的、客観的現象像を現わすもの、即ち基本要因の安全弁乃至は吐け口とみられる症候要因はeo、粗暴な感動を発散させやすいことが了解せられる。

他方、吃児群においては、hyが基本要因である。即ち内気、自己顯示に対する嫌悪がみられ、非現実的空想の世界に安住している。この症候要因doは新しい対象を渴望し、探し求めていると考えられよう。

この母子間にみられる問題を併せて考察するならば、子供に対する母親の情愛、母性愛が時として激しい感動の発散となって子供を覆い、これがため吃児は自我の防禦的抑制機能によって自己の存在を萎縮させ、或いは強い道徳的検閲をもって自己の行動をコントロールしている。これら根源的衝動に支えられて新しい対象を求める現象像が現われていると解されるべきであろう。

II 衝動階級にみられる母子の人格像

本実験の対象である母親群及び子供群において、彼等の人格の中でもっとも力動的に働いている衝動がどの範疇に属するか、即ちもっとも危険を蔵した衝動が何であるかも又、主要な解釈指標となる。

本実験群における母子両者の衝動階級はともにPhyであることは注視されるところである。これは母子ともにその素

第5表 衝動階級

母親群	Phy-
吃児群	Phy-

質においてパラノイア的要素をもつものと考えられる。

IV 中央反応の頻度による母子の人格像

ソンディ・テストの解釈の一つの手がかりとして、衝動弁証法による分析のうち、中央反応について、母、子各々について考察する。

第6表に見られるように、母親群に多いのは、発作性てんかん様、消極的、心気症の各中央反応である。発作性てんかん及び心気症は既に見てきた衝動プロフィールにおける母親の人格像と類似した人格構造をもつものと考えられ、又これら症候は吃の発作と相通ずるものがあることが考えられ興味深いものがある。

子供の場合については、倒錯性、ヒステリー性、心気性の各中央反応を示している。倒錯性については、衝動プロフィールにおいて考察したように、女性的、母性的なものへの衝動と併せて考えられるものである。ヒステリー性中央反応も感情の流れ、ヒステリー様苦悶状態に子供がおかれていることを示したものであろう。これらはいずれも吃児の特徴と考えられる。

V 精神性比率にみられる母子の人格特性

精神性比率について母子両者を考察すると、第7表に示した成績の通り、 α/ψ となり、母子両者ともに女性傾向乃至は中性又は両性傾向を示している。

次に各ベクトル別に性度をみると、

Sベクトルでは母子各々の四倍及び三倍の比率で女性的短音階反応即ち *Moni* が占めている。これは母子両者ともに女性的衝動を示しているものとみられる。

第6表 中央反応の頻度

中央反応の変化					母親群		吃児群	
中央反応の部分欠如・憤怒の鬱積状態 倫理的破壊状態 良心の虜	- 0 0 0	1						
	± 0 0 0		1		1	2		
	+ 0 0 0				1			
消極的中央反応・非社会的中央反応 罪悪感を伴う抑圧せるデーベル 無意識的咎と処罰不安	- - - -	4			1			
	+ - - +	1	7			2		
	0 - - 0	2			1			
妄想型中央反応	0 - ! 0 - !	1			1			
	+ - ! 0 - !	2	3			2		
	0 - 0 + !				1			
分裂病質・緊張病質中央反応	- 0 - ! 0	1	1			1		
抑うつ性中央反応	0 + + -	1	1			1		
病性乃至軽性、破壊性中央反応	0 0 - ! -	2						
	0 + - ! -		4		1	2		
	- + - !! -	2			1			
離人症中央反応	+ - - ±	1			1			
	0 0 - ±		2		1	2		
	0 + - ±	1						
心気症中央反応	+ - - +	1						
	0 - - 0	2			1			
	+ - - 0	1	6		1	3		
	0 - - +	2			1			
軽佻又は嗜欲性中央反応	- 0 0 0	1						
	± 0 0 0		1		1	1		

中 央 反 応 の 変 化				母 親 群		吃 児 群	
奇矯的強迫中央反応	— ± 0 ±	1	1				
抑圧制中央反応	— 0 — +	1	2	1	2		
	0 + — +						
	± — — +	1				1	
ヒステリー性中央反応	+ + — 0			2	4		
	+ + — +					1	
	0 0 — ±					1	
不安神経症，恐怖症中央反応	+ 0 ± +	1	1	1	1		
	+ — 0 0						
発作性てんかん様中央反応	— — ! — ! —	4	9	1	2		
	0 — ! — ! — !	3					
	— — 0 —	2					
	— — — ±					1	
倒錯性中央反応	+ + + ! 0	1	2	1	4		
	+ — + —					1	
	— 0 — +						
	+ 0 0 +					1	
	+ 0 — ! 0						
	+ — ± —					1	
摂取性中央反応	+ — 0 ±	1	4	1	2		
	0 — — ±	2					
	— + 0 0	1				1	

第7表 性度の頻度

対象	ベクトル 性度	Σ		S		P		Sch		C	
		f	性度	f	性度	f	性度	f	性度	f	性度
母親群	Dur	111	♀	16	♀	33	♀	20	♀	42	♂ ♀
	Moll	189		68		46		35		40	
吃児群	Dur	126	♀	22	♀	28	♀	34	♂ ♀	42	♂
	Moll	177		64		54		36		23	

Pベクトルにおいては、母子各々の一・五倍、二倍の比率で♀が優位にある。これは感情の発散が女性的な方法で行われている。即ち内気、内的緊張へと向うものと考えられる。

Schベクトルでは、母親群が一・五倍の比率で♀傾向を示すに對し、子供群では略々一対一の割合で相對している。即ち母親群では自我状態が女性的で、自我減弱乃至は自閉的に作用しているが、子供群ではアンビバレントな混沌とした状態にあるとみられる。

Cベクトルにおける場合はSchの場合とは逆に、母親群において♂の状態を示し、子供群では♂となり♂が優勢である。これは対象との接觸において母親群が二面的な追求を示すのに對し、子供群では、新しい対象の獲得及び古い対象からの遊離を示すものといえる。

VI 母子の人格像にみられる因果性

以上、母親の人格像、子供の人格像の各々について、本実験で試みたソンドイ・テストの成績をもとに考察を試みたが、次にこの両者の因果關係についての検討を行う必要がある。

母親の強い母性愛の発露として、その対象となる子供は折角芽生えた人間化への道を阻止され、益々依頼心を大きくし、幼児的、退行的な自我を形成し、消極的、内向的、女性的な人間となり、一人立ちのできない状態におかれつつ

ある。

母親の期待も大きく、又独占的で過支配的であるために子供たちはその対象から逃避しようとする傾向にあるが、それを果せないために、不安感をもち、いろいろな落着きのない状態に困惑している。

母親の不安、緊張及びそれらの爆発、開放はそのまま子供に反映し、過度の緊張、恐怖、警戒、いろいろな態度を起させ、これらの外的症候として、しばしばみられるチック *tics* を喚起する。一般に吃児はチックと密接な関係があるといわれ、又それを実証する結果が得られているのはこの間の関係を証左しているものと考えられる。

このような母子の因果性は守屋が分類した親の子供への態度及びそれに対する子供の反応と略々一致するものであるが、このような母子の心的メカニズムが相俟って外的症候としての吃を喚起し、促進しているものと見做される。

五 結 論

以上、親子関係の根本問題を明らかにするための一つの試みとして、吃児とその母親との関係を解明すべく、六十三組の吃児と母親にソンディ・テストを適用し、そのテスト像を衝動プロフィール、衝動式、衝動階級、中央反応、精神性比率の各観点から検討してきた。その結果を概括すると、

- i 女性的やさしさ、母らしさ、消極性
- ii 自己顯示の抑制
- iii 自我体系の未熟、乃至自我の抑制による環境への適応
- iv 危険意識の投影的作用

等性衝動圈乃至は自我衝動圈に吃母子の共通特徴を見出しした。又、両者が差異をみせた発作衝動圈、接触衝動圈については、母親群において

- i 妄想的な批判恐怖、不安、感情の氾濫、それに続く荒々しい感動の開放
 - ii 新しい対象追求、獲得への衝迫
 - iii 対象喪失の不安
- 等が顕現し、これに対する子供群では

- i 正義、善ら人間化への欲求とこれに対するパニック、感情の流れ及びヒステリー性の苦悶状態
- ii 新しい対象の渴望及び探索
- iii 古い対象からの離脱、抑圧された他との融和

等が認められた。

これら吃児及び母親の衝動体系が相互に作用し合い、外的には子供の吃という症状になってあらわれ母子間の心理的教育的関係の問題を提起しているものと考えられる。ここに母子関係の是正、就中母親の子供への接触態度の歪曲を正すことにより、即ち盲目的ともいえる母性愛を健全な愛情に置換え、子供の独占的獲得を抑止し、感情の鬱積開放を子供から他に転ずることによって、吃児の感情の動揺、不安を消失せしめ、彼等の求める新しい愛の対象となるることによって吃児の正常な内的発達を導く、強いては吃の解消となり得るであろうことが容易に推測されよう。

親子関係の人格教育上の意義はここに採り上げた吃児の場合に限らず広範に及ぶものであることは始めにも述べた通りでありより健全で教育的な親子の関係がその中で育ち成長する児童の円満な人格を形成する上に大きな礎石となることは疑う余地のないところである。ここに親の子供への態度が、子供をしていかに反映されるかについて、ある

種の確証を得たことは今後のこの種研究への手がかりが得られたものと考え、ソンディ・テストのみに限らず広く投影法を用いて、親子両者の深層における関係を明らかにすることが可能であるとの確信を得た。

最後に本研究は吃児とその母親という屢々得ることのできたものを実験の対象としたこと並びにソンディ・テスト本来の方法を脱した集団的処理により行ったものであることから今後更に検討すべき問題が多くあるう。

- 註(1) 長島貞夫、パースナリティーと社会 二二頁 心理学講座 第十卷一九五四年 中山書店。
- (2) 田辺幸喜、非行少年の家庭環境 教育心理 vol. 8, No. 1. 一九六〇年 日本文化科学社。
- (3) スンダー・L., 高橋省己訳 児童の攻撃 敵意および不安 一九五九年 関書院。
- (4) Jersild, T. Child Psychology 一二八頁 Maruzen Asian Edition 1961.
- (5) 牛島義友、精神発達と教育 九頁 心理学講座 第九卷 一九五三年 中山書店。
- (6) 中西昇他、親子関係の心理学的研究 第一報告 大阪市立大学家政学部紀要 第一卷 第四号 一九五三年 大阪市立大学家政学部。
- (7) Burchinal, L. G., Hawkes, G. R. and Gardner, B. The Relationship Between Parental Acceptance and Adjustment of Children. Child Development 28, 65-77. 1957.
- (8) 堀越伸行、家庭像に対する態度とロールシャッハ・M反応との関連 一八九—一九八頁 ロールシャッハ研究Ⅲ 一九六〇年 誠信書房。
- (9) (イ) 杉原 方、ソンディ・テスト 人文論究 第六卷 第二号 四八—七〇頁 一九五五年 関西学院人文学会。
(ロ) その他 省略。
- (10) (イ) 篠置昭男他、吃音児に関する研究報告 研究所紀要 第十五号 一九五九年 豊中市立教育研究所。
(ロ) 乾原 正、吃児のパースナリティーに関する実験的研究 関学大文学部学士論文 一九五八年。
- (11) Murphy, A. T., & Fitzsimons, R. H., Stuttering and Personality Dynamics p. 419 1960. The Ronald Press Company New York.
- (12) 浜本正之、メモリの正しい扱い方 一九六二年 日本文芸社。

- (13) 生田邦博、吃音児の家族関係の研究 関学大学士論文 一九六二年。
(14) 守屋光雄、家庭に於ける問題児と指導 性格の異常と指導 性格心理学講座Ⅳ 六一—一〇頁 一九六〇年 金子書房。

参 考 文 献

- 杉原 方 ソンデイ・テスト 人文論究 第六卷 第二卷 四八—七〇頁 一九五五年。
佐竹隆三 分類鑑別資料 第一号 ソンデイ・テスト入門 一九五七年 法務省矯正局。
吉田 優 ソンデイ・テストに関する研究 大阪大学医学雑誌 第七卷 第六号 一二—一三三頁 一九五五年 大阪大学医学部。
杉原 方・篠置昭男 浮浪者のパーソナリティⅡ 人文論究 第十卷 第二号 六三—九六頁。
Dei, Su, K., Differential Diagnosis of Delinquents with the Szondi Test. J. Proj. Techn., 18, 33-41. 1954.

——関西学院大学文学部助手——